

聖書：創世記 24：10～28

説教題：主は道中、わたしを導いて

日時：2023年11月19日（朝拝）

アブラハムのしもべはアブラハムから重大な任務を与えられました。その任務とはアブラハムの息子イサクの妻となる人を見つけて来ることです。アブラハムの妻サラはすでに天に召され、息子はイサクただ一人。神はアブラハムを大いなる国民とするという約束を与えておられました。ですから緊急の課題となって来るのはイサクの結婚です。アブラハムは自分が今住んでいる近くのカナン人から妻を迎えてはならないこと、私の国・私の親族から妻を迎えるように！としもべに言いました。前回見ましたので詳細は省きますが、イサクと同じ信仰に立って神の約束を担うにふさわしい人を！ということでした。そこでしもべは主人のらくだの中から十頭を連れ、また主人のあらゆる良い品々をその手に携えて出発します。これらはアブラハムの家がどのような家かを示すものになりますし、またイサクの妻にふさわしい人が見つかった場合、その人またその家への贈り物として差し出すためのものだったのでしょう。しもべはこうしてアラム・ナハライムのナホルの町へ行きました。そして夕暮れ時、井戸のそばに来ました。その時間は水を汲む女たちが井戸にやって来る時間帯だったようです。さて彼はそこでどうしたのでしょうか。

このしもべがまずしたことは祈りでした。12節の括弧から：「私の主人アブラハムの神、主よ。どうか今日、私のために取り計らい、私の主人アブラハムに恵みを施してください。」彼は自分の力に頼って事を進めようとはしませんでした。彼はまず主の名を呼び、主が事柄全体を導いてくださるよう祈りました。前回見た8節でアブラハムは「天の神、主が、あなたの前に御使いを遣わされる」としもべに言いました。すなわち主が見えない御使いを通してあなたを導いてくださると。その主を信じて、主がこれから私が果たす任務を導いてくださるよう、主が備えてくださった人と出会うことができるように、そしてその人をはっきり認めることができるように、と祈ったのです。

続けて彼は祈りました。13～14節：「ご覧ください。私は泉のそばに立っています。この町の人々の娘たちが、水を汲みに出て来るでしょう。私が娘に、『どうか、あなたの水がめを傾けて、私に飲ませてください』と言い、その娘が、『お飲みください。あ

あなたのらくだにも水を飲ませましょう』と言ったなら、その娘こそ、あなたが、あなたのしもベイサクのために定めておられた人です。このことで、あなたが私の主人に恵みを施されたことを、私が知ることができますように。」ある人はこの祈りはどうなのかと問います。そしてしばしば引き合いに出されるのは士師記6章にあるギデオンの祈りです。ギデオンはミディアン人との戦いを前にして恐れ、主が自分に勝利を与えてくださるしるしが欲しくて、このように祈りました。もしあなたが私に勝利をくださるなら、私は刈り取った羊の毛を今晚地面に置きますので、明日地面は乾いているのに羊の毛だけに露が降りているようにしてください。翌朝早く起きて、そのようになっていることを知ったギデオンは、今度は反対のことを祈ります。神よ、もう一度だけ言わせてください。今度は地面全体に露が降りているのに羊の毛だけは乾いているようにしてください。神はこれに答えてギデオンの弱さを支えてくださいました。果たしてアブラハムのしもべの祈りはこれと同じ類の祈りなのでしょうか。私たちの方で色々勝手に指定して、それによって神の御心が分かるようにしてくださいという祈りをしていても良いとこの箇所は語っているのでしょうか。しかししもべの祈りは決して単なるしるしを求める祈りでないことに良く注意することが大事だと思います。彼の祈りのエッセンスはイサクの妻にふさわしい性質を持つ人を見分けられるようにしてくださいというものでした。井戸のそばで旅人が水を飲ませてくださいとお願いをして飲ませてもらうのは特別なことではありませんでした。旅人を顧みることが当然の義務と考えられていた当時においては、多くの人々がその願いに答えてくれるでしょう。しかしこちらから頼まないのに一緒にいるらくだにも水を飲ませてあげましょうと言ってくれるなら、その人は良く気遣いのできる優しく親切な人、進んでもてなす心を持っている人、そしてそのための労を厭わない人であることとなります。しもべは、イサクの妻となり、ともに神の約束を担う人として、このような性質を持つ人を求めたのです。見た目には美しい人とか裕福な家の人を彼が求めなかったことは注目に値します。彼はそれよりも霊的な性格を第一に考え、その人柄が分かるようにしてください、そうしてふさわしい人を見分けられるようにしてくださいと祈ったのです。

この祈りに対して主はどのように答えてくださったのでしょうか。15節以降には次々に主の奇しい導きが現れて行った様子が記されています。まず15節に「しもべがまだ言い終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せて出て来た」とあります。そしてこのリベカがどういう人であるかが紹介されています。「リベカはミルカの子

ベトエルの娘で、ミルカはアブラハムの兄弟ナホルの妻であった。」 もちろんしもべはここまでは分かっていません。しかし読む私たちはこのリベカが主が備えた人だったとここで教えられているわけです。その彼女は「しもべがまだ言い終わらないうちに」出て来たと言われています。思い出されるみことばはイザヤ書 65 章 24 節：「彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。」主はいかに進んで私たちの祈りに聞いてくださる方かということです。主は備えてくださる神であり、いわばスタンバイしておられます。その主に私たちが祈るなら、主は喜んでこのように答えてくださるのです。

またそのリベカは「非常に美しく、処女で、男が触れたことがなかった」と 16 節にあります。先に触れましたように、しもべはこういう外見に関することは祈りませんでした。それは第一に求める条件ではありませんでした。むしろ彼は良い霊的な性質を持つ人を求めました。そのような正しい祈りをささげるなら主は彼が祈らなかったことにおいても祝福くださるということがここに示されているのではないのでしょうか。見た目に美しい人を！という願いは、信仰者の観点から言えば第一に祈るべき事柄でないことは聖書全体から明らかです。しかし正しい祈りをささげるなら主は祈らなかったことについても祝福をくださるのです。

しもべは最初に現れた彼女のところへ走って行って言います。「どうか、あなたの水がめから、水を少し飲ませてください。」ここでのやり取りは先のしもべが祈った内容といくらか違うところがあります。そこに注目すると、より意味深いことが見えて来るように思います。それはこの箇所が強調しようとしていることであると思われる。まずしもべは控え目な言い方をしました。先の 14 節では「どうか、あなたの水がめを傾けて、私に飲ませてください」と言うことができましたが、実際の彼は「どうか、あなたの水がめから、水を少し飲ませてください」と言いました。小さなお願いとして述べました。これに対して彼女は 18 節で『どうぞ、お飲みください。ご主人様』と言って、すばやくその手に水がめを取り降ろし、彼に飲ませたとあります。先の祈りになかった要素は何でしょうか。それは彼女が「すばやく」応対したことです。つまり彼女は進んでこのことをしてくれました。嫌々ながら渋々応対したわけではありません。ここに彼女の性質が明らかにされています。

また彼女は 19 節で「あなたのらくだにも、飲み終わるまで、水を汲みましよう」と

言いました。頼んでいないのに周りの状況を見て進んで奉仕を申し出てくれました。ここにもしもべが願った通りの姿が示されました。しかしそれ以上だったことがここにも示されています。先の祈りにおいてしもべは娘が「あなたのらくだにも水を飲ませましょう」と言ってくれることを期待しました。しかし実際の彼女の言葉に付け加えられていることは何でしょうか。それは「飲み終わるまで」です。つまりらくだにとりあえずいくらかの水を与えるという程度ではないのです。「飲み終わるまで」とは十分にあげますということです。そのためには大変な労力が必要とされるでしょう。十頭分のらくだですから何度も水を汲みに往復しなければならないかもしれません。しかし彼女は進んでこの奉仕を引き受けました。20節を見ると「急いで」この働きをしたとあります。また再び井戸まで「走って行き」ともあります。そして「すべてのらくだのために水を汲んだ」とあります。必要を覚えている人のために進んで一生懸命に動き、労を少しも惜しまない。これはしもべが願った以上の人であったことを示しているのではないのでしょうか。

21節にしもべは「主が自分の旅を成功させてくださったかどうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた」とあります。私たちだったら、ここまで見たらもうこれは御心の人だ！と喜んでさっさと結論付けるところではないかと思えます。そして次の行動へとすぐに移って行く。しかしこのしもべは性急に結論付けませんでした。本当にこの人は主が備えてくださった人なのかどうか、なお慎重に見極める道を進みました。これは彼が主の御心に従うことを大事に考えていたからに他なりません。主が備えてくださった人でないなら、いかに人間の目に良いと見える人でも、それは真の祝福には至らない。彼はやる気持ちを抑えて冷静に見極めようとしてしました。主のタイミングよりも先に自分の足を進めるようなことはしませんでした。彼は黙って主の導きを待ったのです。

そうしてついにはらくだが十分に水を飲み終わった時、しもべはこの人こそイサクの妻に迎えるべき人であると確信して彼女に贈り物を差し出し、尋ねます。「あなたは、どなたの娘さんですか。どうか私に教えてください。あなたの父上の家には、私どもが泊めていただける場所があるのでしょうか。」すると驚くべき答えが返って来ました。彼女は「私は、ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です」と答えました。前に見た創世記11章27～29節から分かりますが、ナホルはアブラハムの兄弟の一人で、ミルカはアブラハムのもう一人の兄弟ハランの娘です。そのナホルとミルカの子であ

るベトエルの娘ということは彼女はアブラハムの二人の兄弟の両方を先祖に持つ子どもであるということになります。アブラハムは私の親族のところへ行ってイサクに妻を迎えるようにと言いましたが、まさにその条件にピッタリかなう人です。もう何も言うことはありません。

しかしそれで終わりではありませんでした。最後 26 節以降にこのしもべがもう一度祈った様子が記されています。26 節と 27 節：「その人は、ひざまずき、主を礼拝して、こう言った。『私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は、私の主人に対する恵みとまことをお捨てになりませんでした。主は道中、この私を導いてくださいました。主人の兄弟の家に至るまで。』」最初は祈っても事が導かれた後は祈りを忘れる。そうして主に栄光を帰さないということは、ともすると私たちにあるのではないのでしょうか。しかし彼は主により頼みながらこれまで歩いて来た者として、事が導かれた時、すぐに主に感謝をささげ、主に栄光を帰しました。この話はまだ続きます。これからリベカの家へ行って証しをし、家族の了解を得、また何よりもリベカ自身の同意を得なければなりません。そのためになお祈りをもって労するしもべの姿を私たちは見て行くことになります。

今日の箇所を振り返って思うことは最初と最後に祈りがあったこと、そしてその二つの祈りに挟まれた部分に神の導きが生き生きと記されていたことです。その真ん中の部分には「主がこれこれこのようにした」とか「主がこう言われた」という言葉は一切ありません。主は直接的には出て来ていません。しかしそこは明らかに主がしもべの祈りに答えてどのように導いてくださったのか、その導きを記した部分となっています。つまり私たちの生活も祈りに包まれているなら、終始祈りに挟まれているなら、一見自然に見える出来事の中にいかに神が豊かに働いてくださるかということ語るものなのではないのでしょうか。私たちはこのしもべの姿に導かれて、なお一層祈りをもって歩む生活へ導かれたいと思います。その際、自分勝手な祈りではなく、御言葉に沿って、御心にかなう祈りをささげる者でありたいと思います。箴言 31 章 30 節：「麗しきは偽り。美しさは空しい。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」しもべはこの箴言を知っていたわけではありませんが、これが神の御心にかなう真理であることを知っている者として、その線に沿って祈りました。私たちの祈りもそのように整えられるべきです。また彼は早急に結論付けず、あくまで主が備えてくださったものを受け取ろうとして、慎重に主の御心を吟味し、尋ね求めました。そんな彼

に主は豊かに答えてくださり、彼が祈り終わらない内に導きをくださいました。これはもちろん私たちが正しく祈ればすぐに良い導きを与えられるということではありません。私たちの祈りに対する神の答えには、Yes と No と Wait（待て！）があると言われます。ですからすぐに答えや導きを与えられるとは限りません。しかし今日の箇所を示されていたように、神が私たちの祈りに聞いておられること、そして私たちの祈りに喜んで答えて御心にかなう働きを進めてくださるというのは本当です。そのことを私たちは期待して祈って良いのです。そして神の導きは私たちの思いをはるかに超えるものであることも今日の箇所を示されていた。エペソ人への手紙 3 章 20 節：「どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に」。もし私たちが自分の思いを優先して歩むなら、そうはなりません。しばらくは良くても、やがてそれは壊され、幻滅する方向へ進みます。しかし主により頼むなら、主は私たちの思ってもみなかったこと、考えてもみなかったこと、私たちの思いをはるかに超えることをもって私たちを祝福してください。そのことを覚えてこの週も祈りを大切にする歩みへ進みたいと思います。主は私たちの前に御使いを遣わして導いてくださる神です。私たちに良い御心を行おうとスタンバイしてくださる神です。その神を見上げて、祈りをもってすべての歩みを始めたいと思います。そして主がくださる最も良い導きを得て主を喜び、主に栄光を帰すアブラハムのしもべと同じ祝福の道を行く者とされたいと思います。「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」（箴言 3 章 5～6 節）